平成31年度　児童・生徒の学力向上を図るための調査結果　課題分析表　（小学校）

教科ごとの「教科の観点」における平均正答率の比較

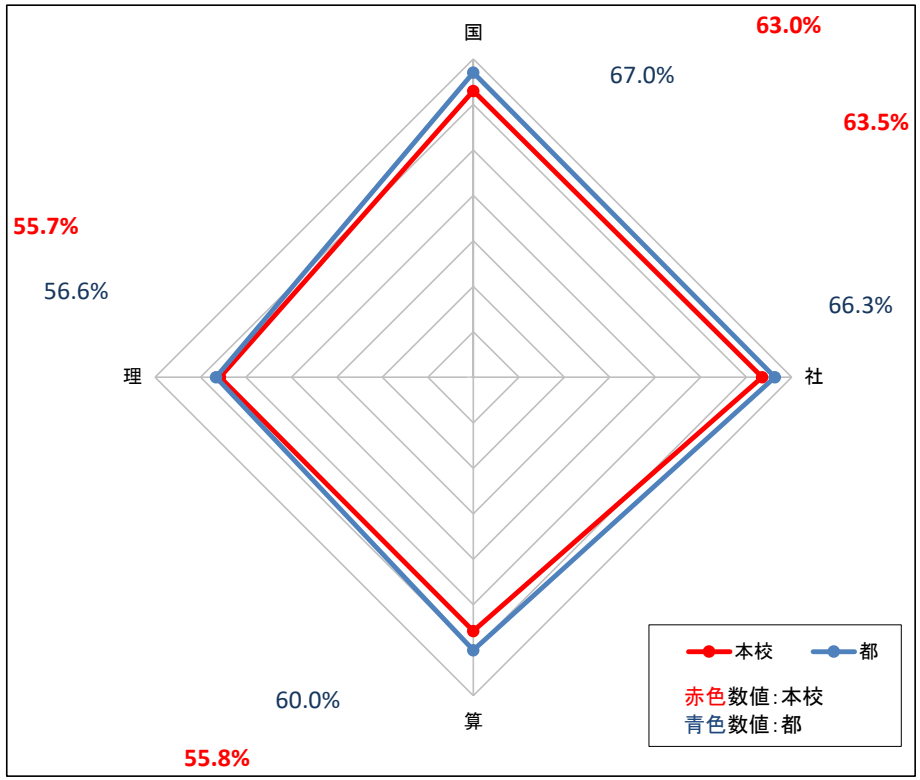
#N/A

国語	教科の観点				
	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能	教科の合計
東京都	65.9%	70.9%	67.1%	65.9%	**67.0%**
本校	64.7%	68.0%	63.4%	60.0%	**63.0%**
都との差	−1.2	−2.9	−3.7	−5.9	−4.0

社会	教科の観点			
	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解	教科の合計
東京都	63.1%	66.5%	69.8%	**66.3%**
本校	62.4%	62.3%	67.8%	**63.5%**
都との差	−0.7	−4.2	−2.0	−2.8

算数	教科の観点			
	数学的な考え方	数量や図形についての技能	数量や図形についての知識・理解	教科の合計
東京都	46.4%	65.2%	67.8%	**60.0%**
本校	41.5%	62.7%	61.2%	**55.8%**
都との差	−4.9	−2.5	−6.6	−4.2

理科	教科の観点			
	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての知識・理解	教科の合計
東京都	52.9%	66.4%	55.0%	**56.6%**
本校	55.3%	61.4%	53.2%	**55.7%**
都との差	2.4	−5.0	−1.8	−0.9



《都との比較にみる本校の状況》

4教科とも都の平均に近い数値であった。授業中は分かっていても、その単元が終わると忘れてしまうことが多くある。「分かったつもり」になっていることがあるので、学習で得た知識や技能を繰り返し確認していくとともに、家庭学習等も含め、苦手なところを重点的に繰り返し練習することを大切にしていく。また、学習課題をしっかりと捉え、正対する学習姿勢を身につけられるよう日常の授業から意識していく。

＜国語＞

漢字を書くこと、読むことに関しては他の問題と比較すると正答率が高いが、文を構成する上で基本的な要素となる主語などの役割については理解が十分でない。

＜社会＞

学習したことは知識として定着しているが、写真やグラフなどの資料から読み取ること、さらにそこから考えることが苦手である。

＜算数＞

選択肢を選ぶ問題が少ない分、無回答が他教科と比較すると多く、個人差も大きい。

＜理科＞

科学的な思考・表現は都の平均を上回る正答率であった。変化させる条件や変化させない条件を区別しながら、観察や実験を行うことついては課題がある。

《授業改善のポイント》

＜国語＞

文法等の基礎的な知識・理解については、教科書を活用して学習することはもちろん、文章を読む学習の中で、主語に注目させる発問を意図的に組んだり、文章を書く学習で、文を推敲する視点として主語のつながりを意識させたりするなど様々な場面で指導をしていく。

＜社会＞

授業の中で、提示した資料から読み取れることを自分の言葉で表現することを大切にしていく。その際、何をどこまで読み取らせるかを明確にしたり、提示する資料を精選したりする。また、複数の資料から読み取ったことを比較・関連させていく。

＜算数＞

まずは、基礎的、基本的な知識・技能の定着を目指す必要がある。単元のはじめに既習事項をしっかり振り返ったり、誤答が多い問題に何度も取り組んだりするなど、家庭学習も活用しながら繰り返し指導していく。その上で、発展問題に取り組む機会も設定する。

＜理科＞

観察や実験から、論理的に考えたり、総合的に考察したりして問題を解決する力を付けるために、根拠のある予想を立てた上で、条件を整理し、問題を解決するために必要な実験方法を考えさせていく。また、実験の約束を丁寧におさえ、実験を安全に行っていく。さらに、予想と結果を比較して考察する活動を意図的・計画的に取り入れていく。

《家庭・地域への働きかけ》

・保護者会や個人面談、学校公開等で、学力調査の結果等をふまえ、児童の学習状況を伝える。

・児童の学習状況を把握し、家庭学習へ反映させる。引き続き家庭学習を徹底していただき、苦手な学習内容を把握して定着するまで声をかけていただけるよう家庭と連携していく。

・正しい生活習慣を身に付けることが、学力向上につながるので、朝食をとることはもちろん、睡眠時間、テレビやゲーム・携帯電話等の使用時間など生活習慣改善の協力が得られるよう発信する。

・質問紙調査の「自分は最後までやりぬくなど、根気強いほうだと思いますか。」という質問に対して25％以上の児童が、「そう思わない」という回答であった。「成果」や「結果」だけでなく、その過程における努力や小さな成長を認めてもらえるよう、ほめほめカードなどを活用していく。また、豊富な知識を生かして行動するなど、知恵に変化させている場面を積極的に認めてもらえるように働きかけていく。学校、家庭、地域が連携して児童の自己肯定感、自己有用感を高めていけるようにする。